

多層化手法による音楽詩劇の創作と上演～アコースモニウムを中心とした音楽と映像、言葉の融合～

(研究代表者＝檜垣智也、劇場実験型公募研究、2020年度・延期分)

アコースモニウム(Acoussonium)の手法を起点とし、劇場空間全体を活用した特殊な投影技法による映像演出と言葉の響きを統合させた新しい音楽詩劇(サウンド・オペラ)の創作、舞台技術の実験と確立を目的として活動した。また、電子音楽や音楽学の研究者を交えて研究会を開催し、演奏装置としてのアコースモニウムから発想した音楽ベースの舞台作品を美的に支える理論的基盤を議論し、その成果を演出技法に取り入れた世界的に類例をみない音楽詩劇の創作につなげることを試みた。



電子音響詩劇「石巻ハ、ハジメテノ、紙ノ声、……」試演

撮影：井上嘉和

老いを巡るダンスドラマトゥルギー

(研究代表者＝中島那奈子、テーマ研究)

国際的に活躍するダンス研究者である中島那奈子氏が研究代表をつとめ、〈老いと踊り〉というテーマのもと、3ヶ年計画の研究活動を行った。中国・北京を拠点に活躍する演出家・振付家であるメンファン・ワン氏、喜多流能楽師の高林白牛口二氏ら多彩な舞台芸術家や研究者と連携。最終年となる2022年度は、研究メンバーとの滞在型のクリエイションを行い、重要文化財である京都府庁旧本館旧議場を会場として最終研究会を開催。ダンスにおける「老い」の感受の仕組みを模索した。



研究プロジェクト 型の向こうへー声のレゾナンスー

撮影：守屋友樹